

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 7 日現在

機関番号：15101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24530628

研究課題名(和文) 地域における包摂型コミュニティ構築の可能性と課題 外国人非集住地域に着目して

研究課題名(英文) A study on creating inclusive community at regional level: In non-concentrated areas of international population in Japan.

研究代表者

仲野 誠 (Nakano, Makoto)

鳥取大学・地域学部・教授

研究者番号：60301719

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、外国人被集地域の事例として主に二つの地域を取り上げた。一つは、鳥取県中部地域を中心に活動を展開している外国にルーツをもつ住民当事者とその支援者たちからなる「Toriフレンドnetwork」という自助組織のネットワークのあり方、当事者と支援者たちの関わり、料理教室などのイベントへの参加の効用などについて調査した。

もう一つの事例としては、鳥取県東部のムスリムたちのコミュニティを取り上げた。これは多国籍のコミュニティであるが、外国人非集住地域で少しずつ増加し続けている新しい「エスニック・マイノリティ」のコミュニティである。これら二つの事例を考察した。

研究成果の概要(英文)：This study tries to describe and to analyze the possibility and problems of building inclusive community at regional level, using case studies of non-concentrated areas of international populations in Japan. International people living in such areas have not been able to create their own self-help networks. They are not fully recognized their host society, either. Japanese people living in the areas are not used to deal with diversity. Therefore, they are getting puzzled with the current "inclusiveness" of the community.

Two case studies, one is "Tori Friends Network" that is a self-help group of international population in central Tottori and Muslim community in eastern Tottori, are introduced in this study.

研究分野：社会学

キーワード：地域社会 共生 外国人住民 多文化

1. 研究開始当初の背景

日本社会で地域レベルでのグローバル化の展開が観察されてから久しい。当初は「内なる国際化」とよばれ、国家的あるいは行政的な課題としてみられていた「国際化」とは異なり、「外国人」というよりも「外国人住民」とともに地域で多様な住民たちがともにどう暮らすかという課題が浮上した。

それに伴い、日本社会における「包摂型社会」あるいは「包摂型コミュニティ」の構築に関する研究あるいは実践が積み重ねられてきた。たとえば外国人住民の処遇、包摂と排除、多文化政策等に関する研究は近年特に蓄積されてきた。当初は現状を明らかにするために事例の積み重ねがなされてきたが、近年はその理論化の試みもなされている（例えば、梶田孝道・丹野清人・樋口直人 2005 年『顔の見えない定住化』名古屋大学出版会）。

ただし、それら研究が対象にしてきたものは、外国人が相対的に多数居住し、それが「問題化」されている地域であった。その現状をまず把握し、そして課題を抽出し、その解決に努めようとする現実的な社会的要請に応えるべく多くの研究がなされてきたともいえるだろう。それは次の3つに大きく分類される。(ア) 在日コリアン等が多く居住する地域、(イ) 日系ブラジル人を中心とする「ニューカマー」たちが多く居住する「外国人集住地域」、(ウ) 男性の結婚難をその背景とする「外国人花嫁」が多く住む農山村である。

上の(ア)の在日コリアンと地域社会に関しては、既に膨大な研究の蓄積がある（例えば、谷富夫編 2002 年『民族関係における結合と分離』ミネルヴァ書房）。

(イ)の「外国人集住地域」に関しては、日系ブラジル人を中心とする「ニューカマー」が仕事を求めて集まる東海地方や北関東の「外国人集住地域」に関する研究が、特に近年蓄積されてきている（例えば、宮島喬・小倉充夫・加納弘勝・梶田孝道編 2002 年『国

際社会』全7巻、東京大学出版会）。

また、その子どもの不就学問題が社会的にクローズアップされていることもあり、極めて今日的な社会問題として注目されている（例えば、佐久間孝正 2006 年『外国人の子どもの不就学』勁草書房）。行政・政治的には、これら当該地域の自治体が「外国人集住都市会議」を結成し、これらの外国人居住者を自らの地域の「住民」と定め、自分たちの地域を共につくっていくメンバーとして位置づけることによって新しい地域づくりを模索し始めている（仲野誠 2008 年「地域社会とグローバル化」藤井正・光多長温・小野達也・家中茂編『地域政策入門 未来に向けた地域づくり』ミネルヴァ書房）。

(ウ)の「農山村の外国人花嫁」については、その研究は(ア)と(イ)に比較して多くないものの、現状把握、課題の抽出、今後の展望を明らかにしようとする研究がなされてきた。たとえば今日の「外国人花嫁」にのみ焦点を当てることなく、それを当該地域の昭和恐慌時以降のキリスト教救村運動等にみられるキリスト教徒たちによる地域づくりまで研究の射程を広げることにより、今日の異質性受容の条件を歴史的に明らかにしようとする試みがある（仲野誠 2003 年「政策としての文化とコミュニティの創造 東北地方の山村における異文化の戦略的包摂を事例にして」『鳥取大学教育地域科学部紀要』4(2)など）。

以上、(ア)～(ウ)のような、外国人が多く住む地域に関する研究は着実に積み重ねられてきた。それはすなわち「可視的な問題」への対応であり、大きな社会的意義がある。しかしこのような可視的な問題に関する研究は増える一方で、外国人が相対的に少ない地域に関する研究は殆どなされないままである。ところが、外国人住民が相対的に少ない「非集住地域」では、地域に確実に存在する／増え続ける外国人住民への対応の経

験やノウハウをほとんど持たず、変化し続ける現状に苦慮する多くの行政職員、学校関係者、地域住民が存在するのも現実である。その問題は、外国人集住地域におけるそれとはおそらく異質のものである。さらに問題だと思われるのは、非集住地域では何らかのきっかけで外国人と関わるようになった／関わらざるを得なくなった一部の人びとが苦慮することになってしまい、それ以外の人たちにとって問題は認識すらされていないことだ。一方、外国人住民たちも「点」として地域に存在するままで、ネットワーク等による相互扶助のシステムをもっていないことが多いようだ。つまり、非集住地域においては、外国人住民をめぐる課題は多くの人たちにまだ問題として認識すらされていないが、現実には着実に変化している。

これまでの研究もこのような「普通の」地域にはまだ十分に着目していない。筆者は、これまで農山村における「ムラの国際結婚」の研究を通じ、多文化共生論の主たる舞台であった都市とは距離を置いた研究を進めてきた。その研究過程において、外国人住民の数が相対的に少ない鳥取県の行政職員・教育関係者・地域住民との関わりの中で本研究テーマの重要性に気付くようになった。外国人住民をめぐるこれまでの多文化共生社会論等の先行研究のレビューや、筆者がこれまで科研費等をもとに実施してきた農山村における異質性受容の研究をさらに発展させ、この領域における研究の射程をさらに広げたいと考える。

2．研究の目的

この研究で、外国人住民の自助組織ネットワークと、ムスリム住民のコミュニティと近隣者化の関係性という二つの事例を通して明らかにしたいことは次のことである。

・非集住地域における外国人住民自身のつながりの様相

・非集住地域のホスト社会が外国人住民の存在や彼らとの共生の重要性をどの程度認識しており、どのような試みを実施しているのか／いないのか

次に先行事例・先行研究を調査・整理し、外国人集住地域における異質性受容の可能性や限界を明らかにする。

そして、集住地域と非集住地域とを比較検討することにより、これからの日本の地域社会における異質性受容あるいは包摂型コミュニティ構築の可能性と限界をより広く明らかにする。

3．研究の方法

二つの事例による聞き取り調査を中心に、外国人住民たちによって生きられているリアリティを描き出すことに努める。ひとつは鳥取県倉吉市を中心にする鳥取県中部地域を事例から、外国人非集住地域の現状把握に努める。もう一つは鳥取県東部の鳥取市湖山地域におけるムスリム住民のコミュニティを事例にした調査である。これらから主に以下のことを明らかにする。

- ・当該地域における在住外国人のネットワークの形態やその変化の把握
- ・当該地域において在住外国人自身の生活世界の把握（生きづらさ・喜び・生きがい等）

当該地域において外国人に関わっている様々な主体の試みの現状把握（行政職員、学校関係者、地域住民等）も重要な論点であるが、今回は外国人住民によって生きられているリアリティを描き出すことに重点を置いた。

4．研究成果

(1) 当事者によって生きられている生活世界

本研究の特色は、先行研究が看過してきた外国人非集住地域に焦点を当てることであった。それは、先行研究が見逃してきた「二

ッチ」に光を当てるといふ学術的な意義がある。また、外国人の存在が可視的で強く意識されているわけではないが、グローバルな社会変動により在住外国人が確実に増加し、また生活者としての外国人も増えている日本の「普通の」地域社会における包摂型コミュニティの可能性と課題を具体的に抽出することに貢献するといふ社会的意義をも意識しながら本研究は進められた。

具体的には、鳥取県中部に在住する外国人住民からの聞き取り調査を実施し、当事者によって生きられている生活世界のリアリティを描き出すことを試みた。聞き取り調査の対象の出身地は、中国、ネパール、パラグアイ、フィリピン、ロシア、台湾であり、インフォーマントには在日朝鮮人もいた。そして、それぞれの当事者が鳥取する以前の地域での人的ネットワークや相互扶助のあり方と、鳥取に移住してからのそれらのあり方を比較できるような聞き取り調査を行った。これによって、地域における多様性の包摂や排除のメカニズムを考察するデータを得られると考えた。そして、この調査によって、外国人住民が日本社会に移住した時に生じる困難や、その解決のきっかけなどに関するおもな論点が浮き彫りになってきた。

ただし、本研究の結果、「多文化」という概念が内包する限界や問題点も見えてきた。そもそも、この研究の目的は、「日本における外国人住民の受容／排除の様相と地域における包摂型コミュニティのより現実的な可能性と課題を明らかにすること」である。そこで、その着眼点は、外国人住民の集住度合により地域をいくつかの種類化し、異なる地域間での多文化共生社会の成立具合やその可能性・課題を明らかにすることであった。その分析枠組みはあくまでも狭義の「多文化共生論」の枠内だった。

(2) 多文化共生論の陥穽とこれからの課題

しかし、研究を進めていくうちに、従来の「多文化共生論」が想定する「異文化」の概念や「支援する日本人 支援される外国人」といふような単純な二項対立の図式には回収されない、次のような事例が次々に明らかになってきた。それは外国人の 地域を生きる知恵・技 といえる。

- ・子どもをもつ母親同士としての日本人と外国人住民の付き合い
 - ・地域の消防団員や女性会役員としての外国人住民の地域における役割
 - ・「嫁・姑」問題のような家族内における課題
 - ・地域住民としてのムスリムたちの地域活動への参加などを通じた近隣町内会との関係性の構築
- など。

ムスリム住民について言及すれば、2014年に鳥取県で最初のモスクが鳥取県東部の鳥取市湖山地区に開設され、鳥取県東部在住のムスリムたちのコミュニティの中心になっている。ところが、ムスリムたちによるモスク開設計画は、当初は当該地域の住民には事前に十分な告知がされておらず、総合理解が不十分なままに「見切り発車」の状態で開催されている。

このような状況下、文化や宗教面において「異質な他者」を受け入れた経験に乏しい当該地域住民とムスリム住民たちはそれぞれのリーダレベルで話し合いを続け、地域に「軟着陸」する形で、手探りでの共生への模索が続いている。そこには町内の一斉清掃など、地域活動へのムスリム住民たちの積極的な参加なども見られる。

従来の狭義の「多文化共生論」はこれらの現実をうまくとらえきれない。それどころか「ジェンダー」や「世代」に起因する課題を「文化」の問題に回収したり、あるいは問題の本質をすりかえてしまう恐れすらある。かといって上記のような具体的な問題は「多文

化」とは無縁で普遍的問題であるともいえない。そこで従来の「多文化共生論」からはみ出す、地域におけるこのような具体的な現実をどう捉えるかが課題になる。そこで「社会的包摂と排除」の枠組みを使い、地域と住民の多様性に関するより包括的な研究が必要になると思われる。

日本でもグローバル化に関する議論が進展し、それに伴って外国人が相対的に多く住む地域に関する研究は着実に積み重ねられてきた。それはすなわち「可視的な問題」への対応であり、大きな社会的意義がある。しかしこのような可視的な問題に関する研究は増える一方で、外国人が相対的に少ない地域に関する研究は殆どなされないままである。ところが、着実に存在する／増え続ける外国人住民への対応の経験・ノウハウを殆ど持たず、変化し続ける現状に苦慮する多くの行政職員、学校関係者、地域住民が存在するのも現実である。その問題は、外国人集住地域におけるそれとはおそらく異質のものである。

また「多文化共生」という概念で地域の現状を捉えることによって見落としてしまう問題があることも改めて指摘しなければならない。それはこの概念が「外国人 日本人」という二項対立的な思考を促してしまい、狭義の「多文化」以外のファクターを削いでしまうという問題である。さらに言えば、「支援される外国人 支援する日本人」という二項対立的に単純化された枠組みによる理解にとらわれてしまい、生活者として地域で蓄積されてきた外国人の経験の豊かさを見過ごしたまま「外国人支援」の議論が先行してしまうという落とし穴がある。

鳥取県の登録外国人は男性 1300 人に対し、女性は 3000 人である(2010 年現在)。そこには大規模なエスニック・コミュニティは存在せず、外国人は基本的にひとりの生活者として地域を生き、その経験を通じて紡ぎだして

きた生きる知恵や技が存在する。このような地域の現実を把握するには、「多文化」に加え、「ジェンダー」や「世代」などの他のファクターを概念装置として採用しつつ、より包括的な研究を展開する必要がある。

「外国人住民」と一言と言っても、その内部こそが多様である。20 年以上日本の地域社会に住んでいる「ベテラン」たちは、長い時間をかけて蓄積してきたコミュニティ形成や、地域住民との関係性を築く技法をもちっており、自分が地域社会に包摂されるのみならず、自らが地域社会の住民たちを包摂する経験も積み重ねてきた。

一方、ムスリム住民たちのように、日本の地域社会に住み始めてまだ間もなく、コミュニティの拠点(モスク)が開設されたばかりのコミュニティの場合は、近隣町内会のリーダーと少しずつ対話を重ねながら、当該地域社会で自分たちができることを手探りで探し始めたところである。

このような今日的な課題を「多文化共生」というよりは「包摂と排除」という枠組みを使い、そのダイナミズムをより丁寧に描いていくことが必要であろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 13 件)

仲野誠、日本の大学生が経験した朝鮮学校
岡山県民族教育実施 70 周年記念式典、
朝鮮学校のある風景、一粒出版、査読無、36
号、2016、132-142

仲野誠、日本の大学生が経験した朝鮮学校
第 44 回在日朝鮮学生美術展・鳥取展、朝
鮮学校のある風景、一粒出版、査読無、35 号、
2016、59-70

中村稜子、仲野誠、日本の大学生が経験した朝鮮学校 全国朝鮮学校美術部合同合宿から鳥取展へ、朝鮮学校のある風景、一粒出版、査読無、34号、2015、33-43

仲野誠、日本の大学生が経験した朝鮮学校 岡山朝鮮初中級学校大運動会編、朝鮮学校のある風景、一粒出版、査読無、33号、2015、57-68

仲野誠、非セクシュアル・マイノリティ当事者の立ち位置についての小論、架橋、(財)鳥取市人権情報センター、査読無、33号、2015、52-60

仲野誠、日本の大学生が経験した岡山朝鮮初中級学校の運動会(下)、朝鮮学校のある風景、一粒出版、査読無、28号、2014、111-126

仲野誠、日本の大学生が経験した岡山朝鮮初中級学校の運動会(上)、朝鮮学校のある風景、一粒出版、査読無、27号、2014、170-183

仲野誠、日本人来場者が経験した在日朝鮮学生美術展、朝鮮学校のある風景、一粒出版、査読無、25号、2014、140-150

仲野誠、この時代に在日朝鮮学生美術展と出会うということ、朝鮮学校のある風景、一粒出版、査読無、23号、2014、145-150

仲野誠、地域学研究会 第3回大会報告(執筆箇所:「第1分科会『そだつ・ささえあう』(教育・福祉・多文化共生)」)、地域学論集、鳥取大学地域学部、査読無、第10巻第1号、2013、1-31

仲野誠、書評『ムラの国際結婚再考』(めこん 2012年)、地域学社会学年報、ハーベスト社、査読有、第25集、2013、183-184

仲野誠、つながりの貧困と排除をめぐって、教育、かもがわ出版、査読有、No. 805、2013、103-110

仲野誠、自著紹介 柳原邦光/光多長温/家中茂/仲野誠編著『地域学入門 つながり をとりもどす』(ミネルヴァ書房 2011年)、地域学社会学年報、ハーベスト社、査読有、第24集、2012、153-154

〔その他〕

仲野誠、多文化の鳥取に出会おう フィリピン人、中国人、ムスリム、それぞれのコミュニティに学ぶ、鳥取大学地域貢献支援事業報告書、鳥取大学地域学部・仲野誠研究室、2015、31

仲野誠、多文化の鳥取に出会おう フィリピン人コミュニティに学ぶ、鳥取大学地域貢献支援事業報告書、鳥取大学地域学部・仲野誠研究室、2014、36

仲野誠、多文化共生社会一歩前 外国にルーツをもつ隣人ともっと知り合うために、ノイズを共有しながら互いの声に耳を傾ける集まり、鳥取大学地域貢献支援事業報告書、鳥取大学地域学部・仲野誠研究室、2013、36

6. 研究組織

(1) 研究代表者

仲野 誠 (NAKANO MAKOTO)
鳥取大学・地域学部・教授
研究者番号: 60301719

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし